



第12号

2014(平成26)年
3月31日発行

発行所

京都市下京区堀川通花屋町下ル
仏教壮年会連盟広報委員会

題字：理事長 三嶋統吾

「朋友」とは、同信のなかま。
2008(平成20)年4月の仏教
壮年会連盟発足にあたり、
仏教会員が力を合わせ、とも
に歩みを進めていこうという
願いから名づけられました。

教化活動の 形態について

仏教壮年会連盟
活動推進講師

南 莊 宏



全国津々浦々、各寺院の教化活動の形態は千差万別ですが、話の都合上、大胆に次の二つのパターンに分けて考えてみます。即ち、(パターン1〔P1〕…個別・単一型)と(パターン2〔P2〕…総合・複合型)です。P1型は「〇〇寺壮年会」「〇〇寺仏教婦人会」といったもので、いわゆる各連盟で「単位会」と呼ばれている形態です。それに対してP2型は「〇〇寺聞法会」「〇〇寺サンガ」というように、特に対象を限定せずに行われているものです。これらの活動形態は、恐らくそれぞれの寺院の事情の中でやりやすい型として選択されてきているもので、どちらが良いとか望ましいという評価・判断はできかねます。(勿論、P1型とP2型の両方の形態を持っている活発な寺院もあることでしょう。)

さて、ここで考えていただきたいことは、一旦動き出した教化活動は何とか継続させていかねばなりません、続けていけばどうしてもマンネリ化して停滞したり行き詰ったりすることがあります。そんな時、その打開策として、P1型ならP2型の、P2型ならP1型の発想をしてみることが効果的なのではないかという事です。つまり、P1型で行き詰った場合、一度視点をひろげて、男女・年齢(世代)などの枠を超えた複合的な活動を考えてみるのです。宗門が展開しているキッズサンガ運動への参画は、まさにこのことといえましょう。これは、活動形態を変えてしまうというのではなく、発想を転換してみることによって会の活性化を図るのです。一方、P2型がマンネリ化した場合、幅広い層の中で境



遇の似ているもの同士が個別的に集まって(飲み会・ゴルフ等のお楽しみも可)親密度を増していくことにより、会(寺)への帰属意識を高めていくことが有効ではないでしょうか。ひいてはP2型の中から部会のような形でP1型が生まれてくることも期待できると思います。

ところで、宗門全体の教化活動の現状は、残念ながら下降傾向といわざるをえません、組織教化各団体(連盟)を個

別・単一のP1型ととらえるならば、まさに今、各連盟がこぞつて総合・複合のP2型の発想を持つことが必要だと思います。それぞれ既存の枠の中で物事を考えていても解決策はなかなか見当たりにません。すべての組織教化団体が横に繋がって強力な連携を試みるという、大胆な発想の転換が求められているのです。そして、P2型発想の熟成は、やがて、必ずまたP1型活動形態の繁盛をもたらすと考えています。



寺院仏壮結成に向けて

当連盟では、スローガンに「朋友の輪を拡げ いのちかがやく世界を」を掲げ、寺院仏壮50%以上「現在の結成率約25%」をめざし活動を展開しています。2013(平成25)年度全連区において寺院仏壮結成に向けた研修会が開催されました。

〔第1連区〕

念仏相続の場をなくさぬために

新潟教区仏教壮年会連盟

理事長 田中 勉



第1連区では、平成25年12月7日、新潟教区が担当となり、活動推進講師の藤井邦麿師をお迎えし標記研修会を開催いたしました。

第1連区内の各教区関係者19名および当教区内から20余名を合わせ、全42名の熱心な皆様の参加をいただきました。中でも今回の研修会を機縁として、より活発な活動をしていきたいと、新潟教区地藏堂組のご門徒及び僧侶の皆様が多数参加されたのは頼もしい限りです。

研修会では、藤井講師が新潟教区の寺院仏壮結成率を表で示され、

①未結成の原因

②活性化への取り組みについてなどの問題提起をいただき、話し合いを行いました。

また、お寺の現状について

一、門徒の寺離れ、(法座数・法座日数・参加者数の減少化)

二、農村漁村部の過疎高齢化

三、都市部の門徒同士のつながりがうすいなど厳しい状況を聞かせていただきました。このような中で、仏壮活動を通して、



念仏相続の場所が失われぬよう努めていかねばならないと感じた事であります。当教区では、藤井講師が示されたとおり、未だ136寺のうち100寺もの寺院に仏壮がないのが現状ですが、増やせる余地有りと捉え、寺院仏壮結成に向けて継続した、益々の運動が必要であることを実感いたしました。

〔第2連区〕

将来に向かって拡げよう朋友の輪

東海教区仏教壮年会連盟

理事長 近藤 吉男



第2連区「寺院仏壮結成に向けた研修会」が平成25年12月13日に名古屋別院で開催されました。活動推進講師の南莊宏師にご出向いただき、第2連区内教区から7名、東海教区から10組27名の合計41名の参加をいただきました。

主旨説明の後、東海教区の伊賀組と額田組から活動事例報告があり、続いて南莊講師より班別討論の問題提起がありました。その中で壮年層は寺院にとつては頼もしい存在であり、仏壮活動を通してお寺を近くに感じ、仏法に出遇った慶びと朋友の輪を将来に向かって拡げるのが仏壮結成の願いであるとお話いただきました。また、なぜ結成できないかの議論をするのではなく、未結成寺院でどう行動すれば結成できるのか、既に結成された壮年会の継続への課題は何かを議論のテーマとして提起され、4班に分かれて班別討論に入りました。

班別発表後のまとめでは、お寺にはそれぞれの事情があることを踏まえて、「仏壮結成には、例えば子どもを通して大人が集まるキッズサンガへの参画が

きっかけになる。また門徒で組織する仏壮、仏婦、総代、仏青、少年は大きな家族としてそれぞれの役割があり、住職は組織を横に繋げる役割がある」と述べられました。

仕事に追われ「自らの生き方を親鸞聖人のみ教えに聞く」機会が一番必要なのは壮年層ではないでしょうか。研修会での討論が寺院仏壮結成のきっかけとなり朋友の輪が拡がることを切望します。



〔第3連区〕

寺院仏壮の結成に向けて

大阪教区仏教壮年会連盟

理事長 中西 收



第3連区は「寺院仏壮結成に向けた研修会」を、平成25年8月24日、津村別院仮本堂において、活動推進講師の小林顯英師にご出向をいただき、大阪教区の担当で開催いたしました。

寺院仏壮未結成寺院の門徒を集集して活動している南郡組仏教壮年会での会員の募り方を含め、1年間にわたる具体的な活動事例の発表を受け、小林講師からなぜ仏壮結成が必要なのかを講義いただきました。

その中で「違和感無く念仏合掌できている」ということは、私自身が知らぬ間にお育ての中にあつたということ。しかし、そのお育てが途絶えてしまつてはいないか。また、葬儀と告別式の区別がわからず、直葬が増えている現状は、念仏相続の場所が失われていることである。子どもが手を合わせる環境を築くことができるのは大人社会。仏事、法要、教化団体が活発に活動することが、念仏相続に繋がる」とお話いただきました。

また「寺院の仏壮を立ち上げるなら2、3人からでも良い。それがいつかお

寺の核となる。身の丈に合った活動、続く活動をお願いする」という励ましの言葉もいただいたことであります。

今回、大阪教区全組、全寺院の参加をお願いしたところ、仏壮活動をリードしようという意識、熱意をお持ちの組長方はじめ、僧侶、門信徒の50余名の参加を得て活発な意見交換、質疑応答を含め有意義な研修会を実施できましたこと厚く御礼申し上げます。仏壮の今後の在り方もふくめた研修になり心強くなりましたので次第です。



〔第4連区〕

安芸の地に抗げよ朋友の輪を

安芸教区仏教壮年会連盟

副理事長 溝口 光明



平成25年9月7日に、中・四国ブロックの寺院仏壮結成に向けた研修会を、安芸門徒会館で開催いたしました。未結成寺院の僧侶、門徒を含めた82名もの方々が出席されました。開会式の後、まず私が、安芸教区での寺院仏壮結成の現状と未結成寺院に対する思いをお話いたしました。引き続き、沼田組専念寺の下川理事が、設立以来の苦労された30年間の活動事例を、熱をこめてお話しいただきました。未結成寺院の僧侶、門徒の方には、非常に参考になった話でした。活動推進講師である高橋哲了師による問題提起の後、7班に分かれての班別協議会が開催され、1時間半に渡つての熱い議論になりました。

その後、各班よりまとめの報告となりましたが、やはり未結成寺院においては、僧侶、組長による結成に向けてのポジティブな行動が必要であること。仏壮は寺の手伝い、総代の手伝いを行いながら総代になる前のステップとみなして評価してはどうか、との意見が出てきました。安芸教区では、現在寺院結成率は35・2

%ですが、この研修会を機に1%でも結成率が向上し、安芸の地に朋友の輪が広がることを念じて研修会を終了いたしました。



●第1連区 北海道・東北・東京・長野・国府・新潟 ●第2連区 富山・高岡・石川・福井・岐阜・東海 ●第3連区 滋賀・京都・奈良・大阪・和歌山・兵庫
●第4連区 山陰・四州・備後・安芸・山口 ●第5連区 北豊・福岡・大分・佐賀・長崎・熊本・宮崎・鹿児島・沖縄

〔第5連区〕

仏教壮年会は寺院を育てる

大分教区仏教壮年会連盟

理事長 有 永 俊 文



平成25年11月17日に第5連区の「寺院仏壮結成に向けた研修会」を大分教区の担当で別府別院にて開催いたしました。

大分教区は寺院数289ヶ寺に対し単位登録数65単位で22.5%の結成率となっています。

今回の参加人数は教区内の未結成寺院を中心に僧侶・門信徒で56名と、他に第5連区の役員の方々も参加いただきました。

研修会は佐賀・長崎教区の活動事例報告に始まり、活動推進講師の高橋哲了師が問題提起をされ、「仏壮活動とは何か」から「活動事例報告を聞き、何故仏壮活動なのか」、そして「どの様な活動をめざすのか」、又「結成に向けての問題点と対策と手順」、「初期にどのような活動が必要か」、などについて班別での活発な討議が行なわれました。

最後に各班の代表者による討議発表がありました。どの班の発表も「これから私の寺院にも仏壮を結成するぞ」という意気込みが感じられる内容でした。

高橋講師のまとめのお話の中で、仏壮活動にはメリットや

デメリットが有るか無いかという問いに対し、「活動する事の意義の中にその様な考え方は有り得ない運動であり、目的(朋友の輪を拡げる)を達成する為の方法である」と言われたことが印象的でした。

確かに仏壮活動は寺院と共にご聴聞にいそしみ、社会に寄与することが大切だと思いますが、その為には自分自身が「親鸞聖人のみ教えを聞き、お念仏申す」ということをしっかりと自覚し、同じ道を歩む朋友と寺院を中心とした損得のない活動をするこ

とが大事だと思います。寺院もまた、門信徒と同じ目線で仏壮活動を盛り上げていくことにより、寺院行事などが子や孫へと受け継がれていくことになるのではないのでしょうか。

そしてこのことが「仏教壮年会は寺院を育てる」ということだと思えます。



被災地はいま

〜東日本大震災を忘れない〜

故郷を忘れない

東北教区仏教壮年会連盟

理事 栗原勝夫



3・11の東日本大震災から3年が過ぎました。

地震・津波からの復旧・復興は全国の方々からのご支援を受け着実に進んで来ております。(但し、福島県浜通りを除いて)

しかし、我が福島県においては、東京電力福島第1原発事故による放射能汚染問題を

を抱え、明るい未来は未だに見えておりません。放射能検査で「安全」と証明されても

消費者に受け入れてもらえない米・野菜・魚介類の風評被害、修学旅行生激減の観光地

会津地方、放射能汚染から避難を余儀なくされ故郷を追われ不自由な仮設住宅暮らしを

強いられる多くの人たちが、解決の糸口さえも見出せないでいるのが現状であります。特に、子どもを抱える

家庭では、データ不足による放射能の恐怖から家族バラバラに生活せざるを得ないケースが多々あります。

私が住む中通り地方では放射能汚染はさほど深刻ではな

いとは云え、ポイント・ポイントでは高い線量数値を示す場所もあり、子ども達は外での遊びを制限され運動不足からくる肥満傾向・体力低下が現実の問題として現れてきて

おります。一般住宅敷地内の除染作業も行政の指導により実施されておりますが、除染

作業により排出された汚染土の中間貯蔵施設どころか仮置き場さえ決まっておらず、自

宅敷地内に埋設或いは専用容器により保管しなければなりません。私たち町内会でも、

通学路の除染作業を数回実施しておりますが期待通りに線量数値が下がりません。また、

通学路脇の側溝には雨水が流れ込み、特に高い線量値を示しますが、汚染土処分の問題から清掃・汚泥搬出が許され

ず震災以降実施出来ないでおります。

仮置き場さえ決められない行政に歯痒い思いを抱きつつ、私たちは自分に出来るこ

とをひとつひとつ実行に移しながら生活しております。

私たちは諦めずにガンバってゆきます。「普通の生活を取り戻すまで」
私たちは決して忘れません。「あの美しい豊かな故郷福島を」
今後も福島を忘れないで引き続き応援を宜しくお願いいたします。

